

教職員のコーナー

北国旅情その2 津軽・・・

三浦邦良

「青い空、広がる大地、ここちよい風にふかれて草をはむ馬・・・」前号のY先生の文章を読み、北海道の雄大な自然を思い浮かべた方も多いのではないだろうか。何度か北海道を旅行したことがあるが、冬以外の季節であれば、そのイメージは確かにあてはまる。「人間よりも牛や馬の数が多い」という話もあながち嘘ではないと思えてくる。北海道は牧歌的で明るく、好意をもって受け入れられる。

それに対し、私の故郷である「青森」、中でも「津軽」に対する皆さんのイメージはどうだろうか。「北のはずれ、七つの雪、出稼ぎ支度・・・」まさに、演歌で歌われているイメージではないだろうか。同じ北国ではありながら、北海道から受けるそれとはかなり違い、どちらかという、暗く、あまり好意をもって受け入れられない。石川さゆり、新沼謙二、吉幾三が悪いとはいわないが、誰か、「明るい津軽」という一面も歌にして全国の人々に広めてほしいものだと思う。

津軽を受け入れがたくしているものの一つに、「津軽弁」があるのではないかと思う。日本で一番難解だと言われている方言「津軽弁」、どんなものかという・・・。

特徴その・・・言葉が短い

[しんしんと降り積もる雪の中、二人の男が下を向きながら逆方向から歩いている。すれ違い様、相手の存在に気付く、ふと顔を挙げると旧知の仲であることに気付く。そのとき、二人がかわした会話。「どさ。」「ゆさ。」その短い会話が終わると、二人はまた、雪をはらいのけようとせず、ただ黙々と歩いていく。]

さて、この二人はどんな言葉をかかわしたのだろうか。(答えは、下欄参照) どうして、このような言葉が生まれたのだろうか。

津軽弁では、自分のことを「わ」、相手のことを「な」という。ここに、津軽弁の本質が表れているように思う。それは、凍てつき、雪のふる長い冬をもつ津軽で、寒い中、たくさんの言葉を交わさなくとも相手とのコミュニケーションをとりたいたいという人々の願いがそうさせたのではないかと思う。大げさにいえば、気候が言葉をつくりだしたといえなくもない。津軽の人間は口数が少ないと言われるのは、そういうところに起因するのかもしれない。

特徴その・・・共通語とは全く異なる別の単語が存在する

例を列挙してみよう。いくつ、おわかりだろうか。

かちゃくちゃね ねまる けっぱる さしね
したばって のったらど ほいど うだで
まいね わんつか (答えは、下欄参照)

これらの言葉が生まれたのは、青森という土地が都から遠く、都の文化が届かず、閉ざされた土地の中で、独自の言語が生まれていったからではないかと考えている。

以上、二つの解釈は、私の推論であり何も根拠はない。

ただ、津軽という土地に長く住み、その生活をしてきた経験から考えたことである。(言語に詳しい方、もし見当ちがいだったら、申し訳ありません。正しい解釈を教えてください。)

ここで、一つ断っておくが、上のような言葉を津軽に住む人間がみんな使っているかという、決してそんなことはない。学校現場でも、100%とはいかないまでも共通語を使って授業している。だから、子どもたちはアクセントが多少違う共通語を話し、上のような津軽弁を知らない子が多い。しかし、使う頻度は高くないにせよ、大人になるにつれ理解していく。それは、やはり周りの環境にある。周りの大人が口にしているのを聞き、自然に覚えていく。誰が教えなくても、見よう見まねで次第に身に付けていくという図式、わたしは、方言に限らず、それが本来の地域文化のもつ姿だと思う。地域に対する愛着は、人から押しつけられるのではなく、自然に自分の中においてくるものだと考える。もちろん、私は、津軽弁が好きだし、明るい津軽も暗い津軽も全て受け入れることができる。

ここ、異国の地、韓国に生活していると、どうしても、「日本と韓国」という「国」の視点で物事を見たり考えたりしてしまう。それはもちろん大事なことだが、「韓国」を考える前に、「日本」をみつめなおすことも必要ではないかと思う。幸い、ここ、日本人学校には、たくさん地域から先生方や子どもたちが集まっている(47都道府県中、約1/3)。みんな、それぞれ出身地の「文化」を背負ってここに来ているわけだから、釜山日本人学校は、いわば、地域文化の集合体だといってもいだろう。「日本」を理解するのにまたとない恵まれた場所である。そのスタートは、やはり自分の生まれた地域の文化を知ることだろう。その文化を大切にし、その他の地域の文化を知ることが「日本の文化」を知ることにつながる。それは、方言でもいいし、祭りでもいい。歌や食べ物、住まい、服装・・・など何でもよい。クラスや学校のみならず故郷の文化を話し合い、ひろめていきたいものだと思う。そうした場で培われた文化に対する見方や考え方が、しいては、今生活しているこの「韓国」の文化をみつめる目を育てるのではないかと思う。

9月末、日韓友好年の行事の一環として、津軽の誇る「ねぶた」がソウルの街を練り歩いた。跳人(「はねと」ねぶたの前で踊る人たち)の一人として、また、太鼓やお囃子の音を聞くためにソウルまで駆けつけたかったが、行事の関係でかなわなかった。ソウルの人たちに、津軽を代表する文化「ねぶた」はどううつったのだろう。帰国したら、40代も中盤をむかえる体にむちうち、「ねぶた」への参加は続けようと心に決めている。「さ、けっぱって、あっこまではねるべし。のめくっていくど、さ、ラッセラ -、ラッセラ -・・・。」という津軽弁を口にしながら。

~ 解答 ~

その 「どこへ行くのですか。」 「銭湯へ行きます。」
その 「わけがわからない」 「座る」 「がんばる」 「うるさい」 「だけど」 「たくさん」 「貪欲」 「手に負えない」 「だめ」 「少し」